

# 三下系TS悪役令嬢

はなぼくろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

才能マンな悪役（バトルもの）令嬢が訳アリ系主人公とか堅物騎士とかをボコってイキるだけの話

5 4 3 2 1

--	--	--	--	--

39 28 18 12 1

目次



コロシウム。騎士見習い同士が各々の研鑽を示し、その門出を占う場所。そこでの結果は後の進路にも影響するのだから騎士見習い達はそれらもう必死に鎬を削り合う。その様は観ていて白熱もすれば、滑稽でもあり、だからこそ見世物としての価値もある。ので暇な貴族連中も騎士学校の生徒と共に唾と野次を飛ばすのに躍起になっている。そんなこんなで外は非常に喧しいことこの上ない。

それに対して此処は比較的静かだった。外の喧騒がどこか遠くのものに感じられる。此処は闘技場の入り口だった。ここを通過して、騎士は自分の闘うべき敵と相見える。だからなのか、闘いの場に向かう者の最後の憩いの場として有ることは、コロシウムにあつて精神を鎮めるにはもってこいの静謐さを保たれている。

そこに、彼女はいた。選手ではない。ここに来る誰かを待つて、彼女は石造りのひんやりとした壁にもたれかかっていた。

ある衝動に駆られて、彼女はここに居る。だからといってもう直ぐここに来るであらうあの女にないを言えればいいのか、まだ分からずにいる。

心の整理がついていない。それでも、実際に相対せば自ずとその目的は果たされるで

あろうという確信があった。そして、はたしてその時が来た。

カツン、と。異様にその登音は響いて聞こえた。思わず顔を跳ね上げる。来た、そう思った。姿も未だ見えていないというのに、彼女は得体の知れないプレッシャーを感じて底冷えするような不吉な予感を覚えた。

ソレはずるりと、通路の奥の影から這い出て来たように見えた。実際はそんなことはないのだろう、そうやって現れたその女はきつと、ただ向こう側からただ歩いてやって来ただけなのだ。それでも、凶兆を思わせるその女の粘ついた不気味さが、彼女を得体の知れないバケモノのように幻視させていた。

ビビるな！

鼓舞するように両頬に平手を打ち付ける。気付けた。乾いた痛みが吞まれかけていた自我を覚醒させる。そうしてやつと、壁から背を離して、彼女は女に向き合うことが出来た。

死人のような白い肌を貼り付けた女だった。とてもではないが血が通っているようには見えない。肩まで伸びた頭髮があまり見かけない漆黒であるからか、余計青白く見える。

そして、目。その眼だ。それが何より彼女は恐ろしかった。女の髪と同様、真つ黒な目玉だった。だけれど、そこに感じられる意思是黒よりもつと黒い。コールタールよ

りも粘着質で、どす黒くて、絶望的な双眼がそこにはあった。彼女にはそれが、肥溜めに溺れ掛けているドブネズミが孕んでいる色と同じモノに感じられた。それが精巧な人形のような細面の上に乗っかっていいるのだから、不気味なことこの上ない。

ソレが幽鬼のようなふらついた足取りで近付いてくる。その視線は胡乱げで、足元を向いてはいるが何処を見ているのかはさっぱり分からない。

「あ？」

やっと彼女の存在に気付いたのか、女の視線が持ち上げられる。

視線が交差する。相変わらず、光沢のない眼だと思った。こちらを覗くその眼には、とてもではないが自分の姿が映っているとは思えなかった。ただ、底無し沼のような闇が広がっているだけだ。

先に視線を切ったのは彼女の方だった。なんとなく、再び呑み込まれかけた雰囲気を感じ取ったから。

「ええと、私を待ってたの？」

気さくに話掛けてくるソレに、あまりにもイメージから乖離したその声音に怖気を感じつつ彼女は「ええ」と返した。

それに対して女の方は頬を掻きながら困った様に肩を竦めた。

「ああ、ごめんなさいね。悪気はないんだけど、どちら様だった？」

期せぬ言葉に、思わず齒噛みする。面識はある。何しろついこの間、この先の闘技場で自分分らは確かに闘つたのだ。結果は彼女にとって惨憺たるものではあつたが、まさか齒牙にすらかけられていなかつたとは。

目に見えて膨れ上がった敵愾心に、女の方はバツの悪そうな顔をするだけだつた。

「いや、顔は覚えているのよ？　ただ、私つてあまり物覚えがいいほうじゃないから。顔と名前が一致しないのよねえ。悪いけど改めて教えて貰えるかしら」

「セリカよ。下の方は………覚えてもらわなくてもいいわ。この前、貴女と闘つた」  
「うん、覚えてる。それで？　私になにか用？」

用。用か。用ならある。でも、何かして欲しい事があるとか、お願いがあるとかそういうことでは無い。伝えたい思いがあつた。どうしても言わなければならぬ言葉があつた。だからセリカはここに居る。

そして、一瞬の躊躇いの後、セリカは毅然として言い放つた。

「貴女のやり方は間違つている」

「………ふうん」

突然突き付けられた否定の言葉に、女は一時驚いたようだったがすぐさま表情を変えた。眼を蛇のように細めて、どうやって鬨ろうかと獲物を品定めするかのような挑発的な視線に切り替わる。



それを見てやはり先程の一見友好的な態度は擬態だったかとセリカは確信した。こちらが、女の本性。

「なんの事だかサツパリね。何を言いに来たのあんたは」

「力の使い方。貴女のように誰かを傷つけ、貶めるためにそれを振るうなんて絶対に間違ってる。強さの本質はきつと、自分以外の誰かを守るとか、そういう正しさの元にある。それを、この先に待っているアイツが、貴女に教えてくれる。……… 言いたかったのはそれだけ」

自分の力量では女にそれを伝えることが出来なかった。だからそれを言葉にしに来た。悔しいが、自分よりもきつと強い幼馴染にそれを託した。こんな負け惜しみしか言いに来れないような自分に恥ずかしさを覚えながら、それでも彼女は女に一言申さずにはいられなかったのだ。

言いたいことは言い切った。「邪魔したわね」と女に言葉を掛けながらこの場を後にしようとするセリカの背に、「待ちなさいよ」と女の声が投げかけられた。

「力の本質ですって？ 私より弱っちいあんたに、一体チカラの何が分かってるって言うの？」

女の挑戦的な言葉に、セリカは足を止めた。女の言葉は、全ては否定しきれない。セリカが彼女より弱いということは、この間の一戦からしても覆し切れない事実だった。

一目瞭然の力の差がセリカと女の間にはあった。

それでも、真の正しさが何であるかはセリカにも分かっているつもりだった。

「確かに、私は貴女よりは弱い。それでも正しさがどういうモノかは分かる。そういう風に生きてきた人達を、そうであろうとする者達を知っているからだ。だからこそ、私もそうでありたいと思う」

「へえ。じゃあその正しさっていうのは誰が決めたの？ あなた？ 劍聖？ それとも神様？」

「分からない。それでも、過去から連綿と誰かが紡いできたソレは確かにある。そう信じている。普通に生きていけば、誰もがそれを理解出来るはずだ」

そのときセリカはなぜだか、きつと気のせいだと思うが、「普通」と口にした瞬間に、女の気配がそれ以前よりもっと酷く冷めたものに変わったような気がした。

「なにが言いたいかは分かんないけど、兎に角あんたは力は正しさとやらの元にあるもんで、正しい奴はみいんな強いってことを言いたいのね。だから私はその正しい生き方をしてる奴に負けて、そいつを知れて、そう言いたいのね」

言い方は悪いし捻くれてはいるが、概ね合っていたのでセリカは頷いた。それを見て、女の紅い唇が亀裂を思わせる笑みを浮かべた。それに対してセリカは、言い様のない不吉な予感を覚えた。

「ふうん。それじゃあ聞くけどさ」

あんたのお父さんとお母さんは正しくないから死んだっていうことなのね？

言葉を解するよりも早く、既に身体が動いていた。腰に佩いていた剣を抜刀し、迅速に殺意を実行すべく肉体に染み付いた鍛錬の成果を再現しようとしていた。

だがそれは他でもない抹殺の対象である女に阻止された。

いつの間に近付かれたのか、女はセリカの目と鼻の先まで既に接近していて、劍の柄に手を掛けたセリカの腕に手を添えて抜刀を阻止していた。

動かない。セリカは冷や汗をかいた。思いつきり力を込めて抜刀せんと踏ん張っているのに、その病的な細腕のどこに力が蓄えられているのか、ただ手を添えられているだけなのに、セリカの腕は微動だにしない。

驚愕の最中にあるセリカの耳元に、息が掛かるくらい近くに女の顔が近づく。それから、セリカの耳の中に悪意が注ぎ込まれた。

「そういうわけじゃないんでしょね。きつと善良な両親だったんでしょ。でも死ん

だ。そして、それを為した殺人鬼には未だ応報が成されてないときた。何故かしらね。殺人鬼の方が正しかったから？」

「前提が違うのよ。正しいから強いんじゃない。強いから正しいの。あなたの信じる正義の歴史っていうのはね、それ以外の奴を正義の味方とやらが皆殺しにして出来た歴史なの」

「あなたの両親が死んだのは正しくなかったからじゃない。弱かったからよ。あなたの両親を殺した殺人鬼が今ものうのと生きているのは正しかったからじゃない。強かったからよ」

「そんな暴力の世界を見てきたあなたなら、本当のセカイのカタチっていうのが実は分かっているんじゃないの？」

「知っているでしょう？　——　チカラは、全てを肯定する」

\*

物心ついたときに俺は私を自覚した。

俺には前世の記憶がある。といってもロクな人生を送って来なかったので、ロクな記

憶がなかったんですけどね。なんかやたらと豊富なオタ知識とか薄い本並のエロ知識しかない。この記憶要る？

とまあゴミとクズの塊みたいな物の役にも立たん前世の記憶であるが、少なくとも、今世と前世の世界観の違いを理解することには役立った。

今生の俺の舞台は俗にいう剣と魔法のファンタジーってヤツだ。やったね！ 魔法が使えるよ！ イエーイ。

そうと分かれば早速本とか読み漁ったり身体を鍛え始めるのが前世持ちのサガというものだろうが、慌てて行動に移さないのがニートクオリティ。

先ずやることは容姿の確認である。これ常識。APPの善し悪しは今後長い人生にうんざりするほど関わってきます。もう低APPの人生というのは嫌というほど味わってきたので、これが悪かったらリセット案件ですね。いやリセットせんけど。

「うーん、これは美少女ね。間違いない」

薄々と気付いている人もいるかもだけど、一応説明しておく俺の前世は男で、今世は女です。なんか口調が性別に引つ張られてるのはそのせい。

にしても、鏡に映る幼女のあどけない美しさのなんたることかよ。まだ幼さはあるけどこれは将来美人さんですね。見ろよこの黒髪の艶やかな煌めき。これはこの先チャホヤされること請け合い。待ち遠しいぜ。一回美少女に転生してヨイシヨされまくる

のが夢だったんだよほかあ。

「なに鏡の前で突っ立ってアホなこと言ってるのさエンヴィ。気持ち悪いぞお前」

鏡越しにひよこつと金髪蒼眼の将来イケメンが確約されたも同然のがきんちよがそんな失礼なことを言ってきた。

こいつはシリウス君5歳児。俺の許嫁らしい。はあつて感じ。糞ガキが、こちとら美少女やぞ？んな口利いていいと思ってるのかオオン？

因みにエンヴィっていうのは俺の事。あだ名だけどね。本名エンビディア・オブセシオンという。家はそこそこの貴族らしく、早速こうして政略結婚紛いなことをさせられている。なんか俺達の親同士が仲良いとかで口約束でこうなったらしい。もうお前らで結婚しとけよと、おっさん同士釣り合ってるよ。

まあそんなことは置いといて、ここは前世込みで年長者である俺からシリウス君を叱らないとだ。不服ではあるが将来の旦那様らしいので、今のような思ったことを直ぐに口に出すようなアホでは貴族社会は恐らく生きていけないであろうから俺が矯正せねばな。

「はあん？アホって言う方がアホなのよ、そっちこそんな青チヨビた顔で私の部屋に入って来ないでくれないかしら。っていうか随分と汚れてるけどまさか外で泥遊びして来た帰りに私のとこ寄ったんじゃないでしょうねこの馬鹿」

「はあ？ アホな奴にアホって言つて何が悪いんだよ。ちなみにお前の方が馬鹿だ。アホ馬鹿。あつそうそう、そんなアホ馬鹿のお前に土産があつてきたんだ感謝しろアホ馬鹿」

「アホ馬鹿アホ馬鹿連呼すんな、ムカつくんだよアホ馬鹿。——つておまつ、それつてまさか」

高度なやり取りをしている最中、両手を丸めて合わせた中身をシリウスは俺に見せつけてきた。

それまでなんじやらほいと呑気に訝しんでいた俺は、薄らと覗く小さな緑の群れを見て顔を引き攣らせた。

「おまつ、やめろ。それだけはやめろ。落ち着け、話し合おう」

「苦労したんだぜコレ集めんの。こんだけ頑張つたんだから報われるべきだ。そうだろう？」

そう言つて、ニヤついた奴はその手を解放した。そしてばら撒かれる飛蝗、総勢8匹。それが私の部屋に解き放たれた。

悲鳴と共に俺は誓つた。絶対こいつとの婚約は解消してやると。

俺の家について話しておこう。オブセッション家はここバシレウス王国において結構な権力を持つ名家らしい。つまりボンボンもボンボン。この家に生まれた限り、よつほどの事がなきや食いつばぐれないというわけである。

がはは勝つたな、風呂入ってくる。いやあこれで底辺貴族かなんかでいつ首を切られるかも分からんっていうならさ、俺も腹括つてなんかせにやらんかなあとか思ってたけど、杞憂だったね。

優秀な兄上もいるし、顔だけはいい妹もいるし、俺が何もやらずともウチは安泰というわけだ。よかったよかった。これで俺も気兼ねなくニート生活を送れるというものだ。

そんなふうを考えていた時期が俺にもありました。

先ず言っておくことがある。この世界には魔法というやつが存在していて、それに伴って魔力というものも存在する。

で、貴族連中っていうのは大抵この魔力が高い。というのも当然で、貴族になるってのは莫大な財をどっかで生み出したとかでもない限り、先祖が戦争で結構な功名を立て



たとかで成ることが多いわけだ。それで戦争するってなったら、この時のメイン兵装が槍とか剣とか弓矢なわけで、めっちゃ強い魔法が使えたらそりやもう無双ルートにいくわけ。

魔力の質や高さはかなり血筋に依存するところも多いから、そんなメチャ強先祖の血筋を引いてる貴族の人間はそりやもう優秀な魔力を持って生まれてくる。

そういう傾向が強いと、貴族社会で魔力の質や量の高さっていうのは本人の評価に直結することに繋がってくる。一目置かれるようになる。

逆に低かったらそりやもう侮られまくる。ぶっちゃけいじめられる。家族にも腫れ物扱いされるようになるしでいい事なし。

とまあこの世界ではそういうふうな背景があるわけだ。

正直ね、この話を知ったときは俺は鼻ほじ状態でしたね。なんでって、俺エリート貴族だからさ、完全に無関係の話だと思うよね。しかもだよ、神様とかそういうのに遭遇はしてないけど我転生者やぞ。絶対チート級の才能が俺の体に眠ってるって、そんなときは信じて疑わなかったよね。

ここまで話して、薄々気付き始めた人も居るだろうから本題に入ろう。

俺氏、魔法の才能なしw

びつくりするよね。俺もびつくりしたし、俺の魔法適性見てくれたセンセイもびつ

りしてたもん。これマジ？って感じで俺の方見てた。流石になんかの間違いだろって感じで何回も再診断してくれたけど、物の見事に適性ゼロって事実を突き付けられた。

その時の俺の気持ち分かる？ せっかく現代社会から魔法アリのファンタジー世界に来たのにお前魔法使えねえからって言われた俺の気持ちが。

精神年齢とつくに大人な俺が久方振りに覚えた高揚感どうしてくれんの？

遠足前に眠れなくなる子供の気持ちでワクワクが止まらなかった俺のこの気持ちはどうすればいいの？

終わったわ。マジで。

そんな訳で、今現在俺は実家でネグレクトを受けております。

なんだろうね、この距離感。今飯食ってるんだけど、一応は家族と同じ食卓を囲ってはいらんだ。でもね、結構近い距離で食ってる他の家族連中に対して俺の席はこのクソデカテーブルの反対方向にある端ときた。これ一緒に食う意味ある？ イヤミですかそうですか。死ね。

「(一)馳走様」

なんか和やかに話してる脇で輪にも入れず飯を淡々と食うのも気まずいんで、さつさと食って早々に自室に戻るに限る。

あくイライラするぜ。何が悲しくて異世界に来てまでんな幼稚な嫌がらせを受け

にやならねえんだ。

「あらお姉様、もう食べ終わりましたの？　相変わらずですわね。そんなにお腹が減っておりましたの？」

そしてコレだよ。席を立てて背を向けた俺にそう声を掛けてきたのは我が妹、アロガシアちゃんだ。まだ一歳だというのにもう淑やかな嫌味が言えるまで成長している。いや、姉として妹の成長が目覚しいようで鼻が高いよ。未来の社交界は君に任せた。

「ん、まあそんなところよ。にしても随分とまあお上品な物言いが出来るようになったじゃないアロガシア。褒めてやるわ。次は下劣な性根が隠せるようになったらやっとなんて及第点ね」

俺にはお嬢様言葉というのが分からんで直截な物言いです返しておく。

あからさまにアロガシアの目に敵意が滲み出て俺を睨みつけてきたので結構効いたらしい。相も変わらなず煽り耐性は低いな。お姉ちゃんお前のそういうところが好きだぜ。変にスカされるより、そんな感じに悔しさを剥き出しにされた方が気持ちがいいわ。

それはそれとしてこの糞ガキ、いつか目に物見せてやるから覚悟しとけよボケ。

そんな俺達を見る目は様々だ。

お兄様は手のかかる妹連中を見るような目で苦笑いを浮かべている。彼は落ちこぼれ扱いの俺に対しても普通に接してくれるし何かと気に掛けてくれる人格者だ。自分

の立場もあるし、親父の機嫌取りで俺の扱いに関して大きい声は上げられないらしいが、めつちやいい子なので全然気にしてない。寧ろ好き。お前なら未来のオブセション家を安心して預けられるよ……………。

次に母上殿。この人は目に見えておどおどしておられる。なんか言いたげに口を開こうとするが、親父の方をチラチラ見てて機嫌を窺ってる。俺が一番イラつくタイプだ。言いたいことがあるならはつきり言えや！

「エンビディア、そういう言い方は無いだろう。アロガシアに謝りなさい」

そしてこいつ、親父。こいつに関して言うことは特にない。いつも通り。いつも通り俺以外の肩を持つ。

まあ今回に限ってはそう言われても仕方がない物言いをした俺も俺なので一応謝っておく。

「ハイハイ、ゴメンなさい。ちよつと思つたこと直接的に言い過ぎたわね。次はもうちよいオブラートに包んで言うことにするわ」

そういう問題じゃないことは分かっている。敢えて言った。

家長に向かつて俺のような小娘がこんな口をきくなんて、家族の間柄であつても結構な問題に発展しかねない。そんなことは承知の上だ。

正直な話、普段の俺ならなわざわざ立場を悪くしかねないマネはしない。だから理

由はある。

親父は俺にあまり深く干渉できない。強く言えない。たまにこうして威厳保つたために小言を挟んでくるが、実力行使には移れない。それを知っているからだ。

私には魔法の才能がない。それは確かに、一般の基準に当て嵌めたらそうだ。でもね、使えないわけじゃない。使える場面は本当に限られるが、それでも、人の一生を台無しにするだけのチカラは備わっているのだ。

それを、私と私を診たセンセイ、そしてセンセイ伝てに詳細を聞いた親父だけが知っている。

癪だけどね。出来ることなら、普通の魔法が使えるようになりたかったと、心底からそう思うよ。

## 3

この世界における魔法の話をしよう。

といつても実践的な魔法の運用テクニクだったり小技のことじゃない。そつちに  
関しては全くの門外漢なので、あくまでこれは本とかを読んで学べる範疇の、基本的な  
魔法体系の話だ。

先ず、大抵の魔法には属性というものがある。それらは主に火水風土光の五つに大別  
されるんだが、どの属性にも分類不可な魔法は第六属性の固有魔法というやつに纏めて  
押し込められる。

すげー雑な分類だな。考えたヤツ絶対途中で面倒くさくなつたんだろうなつて最初  
は思つたんだけど、現在確認されてる固有魔法にはマジで規則性がなくて、こまかーく  
分類しようと思つたら百とか二百とかじゃ収まらなくなるので応急的な措置としてこ  
うなつたらしい。仕方ないね。ちなみに俺が持つ魔法もこの固有魔法に分類されてい  
る。

んでだ、固有魔法とか聞くとなんかオリジナルスキル感があつてすつごいワクワクす  
る語感があるんだけど、悲しいかな、世間的に評価されるのは五大属性の方だったりす

る。

理由はひとつ。ノウハウの有無だ。固有魔法は能力こそピンキリだが、使い方によっては強いやつはマジで強くて、五大属性なんてなんのそのって効果を持つのも少なくな  
いんだが、如何せん一代きりの魔法故誰も修練方法や運用方法について知らない。

つまり実戦で活用できるような成果が出るまでかなりの期間を要するってことだ。  
しかも時間とコストを掛けても使い物になるかも分かんないときたら、煙たがられるの  
も無理はない。

その点で言えば五大属性魔法の方は過去にも保有者がたくさんいて、教育ノウハウが  
確立されているので短期間で実戦レベルまで仕上げられるし、そもそも五大属性の魔法  
はクソ強いのが大半なのでコスパでいえば圧倒的にこちらが良い。

そして魔法において基本的にエリートである貴族連中はこの五大属性のうち、2―3  
つに適性があったりする。中でもうちの妹は全属性に適性を持つっていうアブレージ  
ワンとかいう稀代の天才。そりゃ調子に乗るわ。俺だつて乗る。

ちなみに俺は全属性に適性がない稀代の落ちこぼれです。いえーい。しかも持つ  
てる固有魔法も実戦じゃマジのマジで使い物にならないっていうどうしようもないカ  
スです。ふおーう。はあ、糞が。

「人の目の前でため息をつかないでくださいな。鬱陶しい。気が散りますの!」

「へえへえ、悪かったわね。こちとらやる事が無すぎて暇なのよ」

俺と妹のアロガシアは今、センセイから与えられた魔法の課題に取り組んでいる。いや、俺はなんにもやっていないのでアロガシアだけがだが。

まあ、俺に限ってはやらないからやっていないんじゃないやなくて、出来ないからやりようがないだけなんですけどね。

それに対して、アロガシアはなんと流石だという感じ。

今こやつは火属性魔法の基本中の基本であり、深奥の技術でもある熱制御の練習をしているのだが、これがヤバイのなんの。

やり方は至って簡単。火の中に手を突っ込む。以上。

いやエグいよセンセイ。11歳児にやらせることじゃねえ。一見地味で簡単そうに見えるこの練習方法だが、ぶつちやけ現役の魔法士にやらせても失敗するレベルの所業だ。

先ず、精神的負荷が凄まじい。

そもそも、魔法の精密操作っていうのはかなり神経を削る作業なのだ。特に熱制御っていうのは精密性が要る魔法の代表格みたいなもので、微細な分子の分布を正確に把握した上で常に魔法でそれらの動きを抑制し続けるなんてことは余程集中してなきや出来ない。



加えて、ミスったら即座に手が火傷するというプレッシャー。火の中に手を突っ込むって時点で、安全が確立されていたとしても一般人なら躊躇うくらいなのに、一体どれだけの精神統一が成されていればこれが出るのか。

「ふう」

一段落ついたのか、アロガシアは燃え盛る炎から手を引っこ抜いた。時間にして30秒ほどだっただろうか、さしもの天才少女も堪えたのか顛顛から脂汗を流していた。

先程まで高温で炙られていたはずの右手は相も変わらず白く綺麗なままだ。それはつまり完璧な制御を行っていたということ。ほんとに、羨ましい限りだ。

「あら、熱心に私をお見つめになられて、どうかなさいましたの？」

ちっ勘づかれたか。羨望混じりの視線に気付いたアロガシアはめいっばいのドヤ顔を貼り付けて、惚けたことを抜かしてやがる。

「別にいい？ 泣き虫で弱虫のアンタがまた無理してドジ踏んだんじゃないかって見てただけよ」

嫌味つたらしく言ってやるとアロガシアは物凄い形相をして俺を睨み付けてきた。魔法は一丁前のくせにこういう所は歳相応だなあコイツは。そういうところが可愛げでもあるんだが。

はあ。昔はもつとちっちやくて、いつもお姉ちゃんって言いながら背中にくっついて

きてたのに、どうしてこうなったんだろうなあ。

まあ俺が出来なせいですけど。一度見下されちゃ、姉妹関係なんて容易く破綻するわな。はあ。

なんだか凹まされた気分でセンチが俺に渡してつた羊皮紙を指先で摘む。

センチは俺の魔法適性を見てくれた人なんだが、ウチで雇われた魔法の家庭教師でもある。でも結構有名な人らしくて、毎日忙しいところを合間を縫って来てくれるもんだから月に二三度しかやって来ない。

そんなんだから偶にやって来るときは個別で見ちゃ時間が無いので俺達姉妹をまとめて見るようになってる。

でも俺は基本的な魔法なんて使えないので専ら妹につきつきりになって教えていて、俺はその隣でペーパー問題だ。馬鹿にしてんのか。

隣で妹がどんだん魔法を使いこなしていく様をこれでもかと思せつけられる姉の気持を少しは慮って欲しい。

あーくそ。なんだかだんだん腹が立ってきた。むしろくしゃを抑えるためにアレやるかアレ。

そうして俺が念じると指先で摘んだ羊皮紙がひとりでに捻れ、折り畳まれ、折り紙みたく鶴を象ってゆく。

これは魔法じゃない。魔力操作の応用だ。魔力は純粋なエネルギーとして活用できるだけでなく、量を貯めて放出するとちよつとした推力になる。

そうやって発生させた推力をこういい感じに捏ねるとあら不思議。手を使わずともこうして折り紙ができるわけである。

すごいでしょ。え？ くだらないって？ ああ、そうだよクソツタレ。これが俺の全力だ。こんなペン回しと同レベルの宴会芸擬きが俺の魔法技術の全てだ。なんか文句あるか。オオン!?

..... なんか悲しくなってきたな。帰るか.....

「ちよつとどこ行きますの。まだ先生が課したノルマも終わらせていないでしょう」

席を立った俺の背中にアロガシアがそんな言葉を投げかけてくる。相も変わらず真面目ちやんだなあくおめえはよお。

「何処につて、帰んのお私の部屋にね。いい加減、アンタが必死こいて魔法使つてるところにも飽きちやつたのよ。センセイにはよろしく言つといて」

先公がない今がサボり時だしね、こんなとこにいたってストレスが溜まるだけだからとつととおサラバするに限る。じゃあな!

「あ、そうだ。忘れてたわ」

ふと懐に入れていたものを思い出して、そいつをアロガシアの方に投げる。突然投げ

渡されたブツに、アロガシアは慌ただしく両手をワタワタさせながら取り落としそうになったソレをなんとかキャッチした。

手にしたブツをまじまじと見ながら、「何だこれは」とでも言いたげな訝しんだ視線を此方に寄越してくるアロガシアに、俺はぶつきらぼうに告げた。

「火傷に効く軟膏よ。今朝物置からくすねてきたヤツ。隠してるみたいだけど、痛みが酷いようだったら付けときなさい」

お前、上手く隠してるつもりだったんだろぅが俺にはバレバレだかな。今日俺にドヤるためにコソ練してたのかは知らんが、この間から微妙に庇っていた左手の方に結構な蚯蚓脹れが出来てるのが見えた。

精々嫌いな奴から憐れみを受ける屈辱と、日頃から天才なんて嘯いてる自分が地道に努力してるところを知られた羞恥に悶え苦しむといいわ。ギャハ、ギャハハハグベエツフオベエツフオ。

\*

ギリイと、食い縛った歯が軋みをあげたのを感じた。無意識に、あの女が渡してきた軟膏壺を砕かんばかりに握りしめていた。

あの女はいつもそうだ。私を何時までも子供扱いして、いつまで経っても私のことを認めようとしめない。いつも私を見下し、見透かしたような態度を取る。それが酷く許せない。

私はあの女より優れている。才もあるし、十分すぎる努力を重ねてきたし、これからも積み重ねてゆくだろう。

私を見る誰もが私のことを認めてきた。私のチカラを認めざるを得なかった。いずれ世界最高峰の魔法士になるだろうと皆が太鼓判を押してきた。

私はもうただの泣き虫じゃない。ちっぽけな姉の背中について回る弱虫じゃない。

なのに、あのひとは未だに私のことを庇護物でも見るかのような眼差しを向けてくる。私のことを守るべき弱者だと考えている節がある。

違うでしょう！

守られるべき矮小な存在はそちらの方だ。弱つちいくせに私を庇おうとするな。私はいもうお前の背中に隠れて蹲るだけの存在じゃない！

そう、思っていたのに。

「なんでよ……… なんなのよこれは………」

見やるのは、あの女が残して行つた、どこかの鳥を模したオブジェに成り果てた羊皮紙。あいつがこれを手も使わず成したのは見ていた。

自分にこれは出来ない。魔法を学んでいるからこそ分かる。一体、どんな精度で魔力制御を行えば魔力の噴出だけでこんな芸当ができるのか。

やろうと思えば出来るものはいるのだろう。それなりの練習を積んだ上で、集中すればきつと出来るはず。でも、あの女のように、まるで片手間みたいにこんな事ができるかは分からない。才能の壁。

「くそっ」

まだあの女は私の上を行っている。足りない。まだまだ足りない。あの女に私を守られるに足る存在だと認めさせるにはまるで足りない。

もつと頑張らなくては。もつと努力しなければ。もつと。もつと。もつと。

でも、それはいつまで？

先の見えない現実から逃避するように拳を振り上げる。その手の中にあるあの女の優しさを振り払えないから、私はいつまで経っても弱いままなのだ。

捨てろ。

捨てろ。

捨てろ捨てろ捨てろ。

捨てろ！

けれど私は、そうやって何度も念じて、何度腕を振り下ろそうとしても、これまであ

の人の手を払いのけられたことはない。

「長らくお前には辛酸を嘗めさせられてきたが、今日はそうはいかない。決着をつけてやる」

「やれるもんならやってみなさいよ。そのヘナチヨコ剣法で出来るもんなら、ね」

「なんだとこの野郎。負けてほえづらかくなよ」

「口先だけじゃなくちつとは行動で示してみたら？ まあアンタにや無理でしょうがね」

そんなトラッシュトークを交えながら、俺は目の前の人物を見やる。

視線の先、大層に木刀を構えながらやられキヤラ特有の三下オーラを振り撒いているのは我が愛しの許嫁であるシリウス君だ。今日も今日とて見るに堪えぬ糞ガキっぷりである。

そんなシリウスと俺が何をしているかという、果し合いである。というのもこの若僧、俺と顔を合わせる度に俺に勝負を吹っかけてくるのだ。以前私が戯れにウチでお兄さまと稽古していたこいつにちよっかい掛けてそのまま張つ倒したことを根に持っているらしい。女の子に負けちゃって男のプライドが傷ついちゃったんだろうね。



まあ俺も悪いことしたなーって思うし、精神的な年長者として大人気なかったなどは思うんだけど、こいつが弱すぎるのが悪い。

素人の俺から見てもあまりにもすつとろいもんだから負けるに負けれんのかな。それにこいつに負けてイキられるのも癪だから嫌なのだ。

でもまあ、毎度毎度こうして見ると確かに成長は感じられるのは確かだ。以前は馬鹿みたいに突っ込んでくるだけだったのでそこを転ばしていたが、最近は猪口才なことに牽制の真似事は出来るようになったらしい。やたらと剣先をカチャカチャ言わせてる。

まあ真似事に過ぎんがね。見てりや分かるが本命の打突を隠すなんて芸当はまだ出来んらしい。やる気ないのが見え見えなんだよな。付き合う気にもなれないから木刀肩に担いで欠伸をかます。

そんな態度を取っていると舐められていると捉えられたのかシリウスが顔真っ赤にしているのが見えるが、こちとら女の子だから一々構えるの割とキツイんだから多少大目に見て欲しいわ。

生前はこういうのに触ることなかったから初めて知っただけど、木刀って結構重いのよね。漫画のキャラとかが片手で余裕綽々と振り回してるのをよく見てたから舐めてたんだけど、無理。重心が引つ張られる。手から離れる。両手持ちでギリだ。まあ、

これは今まで身体鍛えてこなかった俺にも落ち度はあるんだろうけど。

そんなことを考えていたら流石に業を煮やしたのかシリウスが木刀を振り上げて唸喊してきた。ご丁寧に雄叫び付きで。

でもフェイントかな、多分。腰が微妙に退けてる。重心が後ろ寄り。次には踏みとどまって、こつちが対応したところをズドンって感じかな。

小賢しくなったもんだ。お兄さまの薫陶のおかげかな。まあ見え見えなんすけど。

けど、付き合ってやる。向こうが右足を踏ん張って慣性を殺し始めたタイミングに合わせて踏み込む。

シリウスの表情がギョツとしたものになる。そらそうだ。想定より深い踏み込み、フェイントを読まれた動きをされている上、慣性を殺しきるまでお前は動けないもんだ。いつもみたいにならぬ。こちよこちよこ俺の剣から逃げ回れないってことだ。

でも安心して欲しい。バツサリとはいかん。受けさせてやる。

気持ちスローに振り下ろした木刀を、想定通りシリウスは剣の腹で受け止めた。必然、罅迫り合いの形になる。圧をかける。ギリギリと軋むような音をたてて、俺の木刀がシリウスの側へと押し込まれてゆく。必死の形相で踏ん張ろうとするシリウスだが、にじり寄る重圧は少しずつ歩を進めている。

膂力だけでこうはならない。男と女。性差による筋力量に加え、まして俺は生まれて

このかた鍛えたことなんぞないので、その差はシリウスの方に軍配が上がるのは確かだ。

だがこちらには魔力がある。魔力の放出によつて得られる推力は、使い方次第でこのように劍の重圧を引き上げることにも使える。

シリウスも魔法は使えるので似たようなことが出来ないわけではないだろうが、悲しいかな、そこまで頭が回らないようなのでこのまま潰されるしかないのである。

でもそれじゃあつまらない。俺が求めているのは華麗なる勝利。つまり魅せブだ。

わざと、劍に掛けていた魔力による重圧を解く。瞬間的に、辛うじて拮抗していた力のバランスが入れ替わる。つまり、シリウスの劍が俺の方に押し込まれた。

雪崩込んできた劍を横から抑え込むようにして受け流すと、刃は逸れ、シリウスの体勢が前につんのめつた。俺に半ばもたれ掛かるようにして本気で力を込めていた故に、不意に支えが消えて姿勢が僅かに崩れたのだろう。それが、驚愕の表情となつてシリウスの顔面に表れていた。

それをむぎむぎと見逃しはせん。右脚を軸に半身をシリウスの背後をとるように回転させると、遠心力をそのままに肩を押し込んで更に前へと倒してやる。

極度の前傾姿勢。今にも倒れこもうとする身体を支えるために反射的に動こうとしたシリウスの左脚に、その膝を抑え込むように右脚を絡めてやればあら不思議。

「ぐえっ」

潰れたカエルみたいな鳴き声を上げ、無様にずっこけた。楽勝だぜ。

「はい私の勝ち。これで何戦何勝だったかしら、途中で数えるのやめちやったけど全勝だつてことだけは覚えてるわ」

「クソが。少しは旦那を立てようとかそういうのはないんですかね」

「誰が旦那よ誰が。そういう彼氏面やめなさいよゾツとするわ」

そういうのマジでやめて欲しい。悪寒がするんだよね。こちとら精神テンションは男のそれと変わつてないからね。そういう趣味もないんで、俺の女扱いとかされると怖気が走るわ。縁談の件だつて、今は全く想像がつかないからスルーしてるけど絶対嫌だかな。

それにな、なあにが愛しの許嫁だ。こちとらこやつと顔を合わせてかれこれ6—7年経つが、一度として胸がときめいたことなぞないわ。こいつとチューとかするくらいだつたらアロガシアとやった方が万倍いいね。

せめて俺より強くなってから出直して欲しい。無理だろうけどな！

……… まあ、顔を立てろつていうのは分からんでもない。こいつにはこいつの立

場もあるし、いざとなればこつちが折れて負けてやらんでもない。そういう理解はあるよ俺にも。

「でもアンタ、私を手を抜いたら拗ねるでしょ?」

「当たり前だろ。本気のエンヴィに勝たなきゃ意味ないし。つーわけで、もっかい!!!」

「嫌よ。今日はもう疲れたし。私、女の子よ? そういうところ労わってくれるのが男の甲斐性つてもんじゃないの?」

「なあにが女の子だよ。ゴリラの分際で人に優しさを求めるな。寧ろお前が俺を労わるべきだ」

「アンタ死にたいんだってね???」

むっかつくなあゝこのガキンチョ。いつまで経っても可愛げ無い。こんな黒髪美少女を指さしてゴリラ呼ばわりとか情けなくないんですか?

「なあにがゴリラよ。私が強いんじゃないでなくてアンタが弱いだよ。自分の貧弱さを柵に上げて人を非難しないでもらえるかしら」

「俺が弱い訳ないだろ馬鹿かお前は。なんなら一回お前の兄貴に勝ったことだつてあるんだからな」

さも当然のように悪びれもなくそんな事を言うシリウスに、思わず鼻で笑ってしまった。

お前、ここ数年ずうつと剣術やり込んでるくせして今の今まで何もやってこなかった素人娘の俺に負けてる時点で言い逃れは利かねえんだよ。才能が無いとしか言えない。

それにお兄さまに勝ったって、そりやわざと負けてくれたに決まってるんだろ。お兄さまは俺とは違っておおとなな聖人君子だから、無才のお前にお情けをくれてやったに決まってるだろうが。そういう意味なら俺だって勝たせてもらったこと有るわオタンコナス。

「……………なんだよ。言いたいことがあるならハッキリ言えよ。人のこと馬鹿にしてんの表情見てたら分かるんだからな」

「いや、別に。見た目通りのお気楽な頭だなんて感心してただけよ。他意はないわ」

「やっぱり馬鹿にしてんじやないか。劍を取れ、思い知らせてやる」

「やんねーって言うてんでしようが。しつこいっただらありやしないわね」

ぐいぐい迫ってくるシリウスを面倒くさげに追い払う。本気で面倒くさいのもそうだけど、一々疲れるんだよな。特にこいつも最近是小賢しい手を使うようになってきたからダルいっただらありません。

ま、何度やっても結果は変わらんだろうがね。

「にしてもアンタは相変わらずいつもいつも勝負勝負って飽きないわねえ。そんなに私に負けたままでいるのが嫌なの？」

そこんとこ俺も男だから気持ち分かんんでもないがね。女に力勝負で負けるってのは結構プライドが傷つくことだし。この世界、中世っぽいからなのか男尊女卑の傾向

あるし、全然おかしくはない。

負けりや悔しいのは当然だ。俺だつて万が一にシリウスに負けることがあれば即りベンジマツチを申し込むだろうしな。

ただまあ、ずつと負け通してたら流石に萎えるつていうか。分からされるもんじゃないかな。普通、諦めるだろう。

その点、この執念はどつから湧いてくるのか結構気になるところである。負けん気で言つてんなら大したもんだ。

そんな心づもりで聞いたのだが、意外にもシリウスは顔を俯けてそつぽを向いたように口を閉じてしまった。

……… なんだよ。気になる反応するじゃねえか。

「なによ、いきなり黙りキメちやつて。なんとか言いなさいよ」  
「…………… 違うよ。そんなんじゃないよ」

「別に黙秘するつてなら構わないけどね、それならそれでこつちはアンタが口開くまで永遠に迫及し続けてやるからね。今日は寝れないつて覚悟しときなさいよ」

「お前も大概しつこいなあ!!! 分かつたよ、言えばいいんだらう!!!」

ちよろい。大概の男はこうやつて顔近づけて、身体を寄せてやれば口を開くつてメイド長のオバさんが言つてたが間違いないな。大抵口を割る。観念したように口を開く

シリウスを見ると本当にそう思う。やったことあるの今んとここいつだけだけ。

「…………… お前、魔法使えないんだってな」

「…………… あー」

言いづらそうに、そんなふうには話し始めたシリウスの言葉を聞いてだいたい察した。

このこと、わざわざ言つて馬鹿にされるのもアレなんでこいつに直接話したことは無かつたんだが、一応許嫁なら別口で話が行つてもしやらないな。

だいたいんな落ちこぼれの、しかも女に剣で負けるなんざ他の連中に示しがつかないとかそんな感じの理由なんだろうってことは読めた。

「一回、それで破談の話も出たんだよ。そんな奴を寄越してくるなんて無礼だつて」

いいじゃん。破談。こちとら望むとこだよ。多分、今まで被つた面倒の中で唯一の朗報だよそれは。そのまま進めちゃっていいぞ。御破算になつたんだらうけど。

「それでさ、お前つて結構敵が多いんだらうなつて思ったよ。舐められてるつて言うのもそうだけど、お前世渡りあんま上手くなさそうだしな。沸点低いから」

「余計なお世話よ。一番舐めてんのはアンタでしょ」

敵が多いのは否定せんが、目下最大の敵はお前だからな？

さも俺は違つて言いたげだけど、お前が俺の部屋に虫ばら撒いたの忘れてねえから。あれ後始末クソ面倒だつたんだぞ。メイドには白い目で見られるしよお。踏んだ



り蹴ったりだったわ。

「だから、将来一緒になる俺が守ってやんなきゃなあって思つて」

うん。うん？ 話が突然飛躍してない???

「だから、だから、その肝心のお前に負けてちや格好がつかねえんだよ!!! もつかい勝負しろやオラア!!!」

「やんねえつつてんでしようが。無理矢理繋げてこないでよ鬱陶しい」

なんか恥ずかしさ紛らわすように啖呵切つてるけど恥ずかしいのは俺の方だよ。

なに、その俺様の女アピール。やめてくんない。サブイボが立ったわ。こいつ昔からこういうこと臆面もなく言えるからキシヨいんだよなあ。本当の女の子だったらこういうのに憧れたりするんかね。俺はしないが。

「それに、アンタなんぞに守つて貰わなくても自分のケツくらい自分で拭けるわ。こつちから聞いていてアレだけど、一人盛り上がりつても私としちやいい迷惑なのよ」

善意つちや善意でものを言つてもらつてるのは分かるが、これは俺の問題なんですね。辛辣な物言いをして悪いんだが俺もかつては男の端くれ、他人に自分のことをどうこうしてもらうにはプライドがありすぎる。どうかすつこんでいてもらいたい。

「……………そんなの、分かつてるよ」

拗ねたように小声で呟くシリウス。本当に分かってるんかね？　まあ、こいつが俺の本心を理解してようがしてまいがどっちでもいいんだが。………　少しキツク言いすぎたかな。フオローしとくか。

「でもまあ、アンタが私より強くなってくれるんだったら、それもありっちゃ有りね。期待しないで待ってるわ」

俺はお前のこと嫌いだけど、女の子のためになんかやろうって決意は嫌いじゃなかったぜ。そこだけは認めてやる。

まあガチで全く期待してないけどね。

俺は今、絢爛な裝飾が至るところに施された無駄にだだっ広い廊下を肩をいからせて進んでいる。いつもなら自室に華麗な直帰をキメてベッドの上で微睡んでいるとこだが、今日は事情が違った。というのも、この屋敷のどつかにいるはずのお兄様を探しているのだ。

なんでそんなことしているかという、シリウスの奴に頼まれたからだ。

いい加減ガキンちよとのチャンバラお遊戯にも疲れたからさつきと帰ってお昼寝したかった私は、私が抜ける代わりにお兄様を連れてこいと宣言シリウスの代替案をあつさりを受け入れた。ウチの前途有望な長男を呼び出せとはふてえ野郎だなどは思ったが、話を蹴るとまた駄々を捏ねそうだったので俺は早々にお兄様を売ることにしたのだ。あの二人は仲がいらしいし、お兄様も無下にはすまいと思つたのもあるがね。

にしても、いつも思うのだがウチの屋敷はなんでこうも必要以上にデカいのか。生まれてこのかたずっとここに住んではいないが、未だに迷うときがある。昔聞いた話が本当なら来客用の寝室だけで数十あるらしいし、ここを建てたついでに先祖サマは何を考え

てこんな迷宮もどきを作り上げたのやら。

そんな訳で、ここで人探しをしようってんならもう最悪だ。自室に居なかつたらぶつちやけ総当りしか手は無い。そしてお兄様は気分転換とかいつて毎日部屋を替えてるそうだから無理ゲー。場所知ってそうな使用人を探してはいるのだが、これがなかなか捕まらんしでクソ。

これはもう長期戦を覚悟せにやならんかなって思ってたときだった。

「むっ」

「げっ」

お散歩中のアロガシアと鉢合わせてしまった。いや、ただ歩いてたっただけで本当にお散歩中だったかは知らんけど。

「これはこれは、ごきげんようお姉様。先程までシリウス様と庭で野蛮な遊びに興じていたと思っていたのですが、もうお済みになったので？」

「ああ、見てたのアンタ。もう店仕舞いよ、流石に疲れたわ。んでお兄様にパスしようと思つて探してたんだけど、知らない？」

「さあ、どうでしょう」

如何にもお嬢様つてな感じでスカートの裾を摘んで潇洒に挨拶をキメてきたアロガシアに、俺は面倒くさげに手を振るだけで返す。

いつものごとく嫌味な奴だ。まあ、知らないのは本当なんだろうが。

「あつそ。んじやアンタの方はこんな所で何してんの」

「それをわざわざアナタに言う必要があるまして?」

「つまり暇つてことね?」

ぴしり、と。アロガシアの表情が固まる。凶星をつかれたのか知らんが、少しは感情を顔に出さない術の一つや二つ覚えるべきだと思ふよほかあ。

「ちようどいいわ、お兄様探すの手伝つてくれない? 一人で探してたら日が暮れちゃうわ」

「は、はあ? なんで私が」

「んじや、任せたわよアロガシア」

そう言つてすかさず元来た道へUターンをキメる俺。返事を待たずに速攻で離れるのがコツだ。断る隙を与えてはならない。

こうすると変に真面目な我が妹は義務感に駆られてか大抵言うことを聞いてくれる。素直じゃないアロガシアはこうでもしなきや頼みなんて聞いてくれないね。こんなやり方しか知らない俺を許して欲しい。

ちなみに俺はこの後とつとと自室に戻る予定だ。面倒ごととは他人に押し付けるに限る。これが俺の処世術だ。

「ちよつと！ まだ返事もしてないでしょ！」

ただまあそうは問屋が卸さなかつたらしい。すぐにアロガシアが追いついてきた。

むう、早めに撒こうと魔力操作の要領で多少速度を上げてただけ。ちよつとは速くなつたなコイツも。

「一応言っておくけど拒否権はないわよ。いや、あることにはあるけど。断つたら私も約束フケるつもりだから。そしたらシリウスは今日一日待ちぼうけくらうことになるわね」

「タチ悪………っ！ そういうのお願いじゃなくて脅迫って言ふんじゃないのっ」  
「そうとも言わ。あと、微妙に口調崩れてるわよ」

指摘してやると慌てて口元を押さえるアロガシア。こいつ、変に生真面目なところあるし責任感も強いのでこういう言い方すると断れなくなるのよな。操りやすいことこの上ない。多分、前世の世界にいたら社畜になつて身体壊すパターンの人間だ。そういうところ好感は持てるが、ちと心配になるところもある。

ともあれ、ここで私が折れることはない。この交渉の前提条件として、私が『やらな』と言つたらマジでやらない人間』であるということのアロガシアには信じて貰わなきゃならん。信用と言い替えてもいい。これを崩して、俺が『口先だけの人間』だと思われてしまえば今後アロガシアがお願いを聞いてくれなくなるであろうなので、絶対に

讓歩はできない。

俺は自身の快適ライフのために『やらないと言ったらやらない俺』を証明し続けなければならぬのだ。だから情に流されて折れる気はサラサラない。

そんな俺の硬い意思を感じ取ってくれたのか、アロガシアは深あくあくいたため息をつくと「分かりました」と諦めたように呟いた。

「分かりましたとも。探せばいいんでしょう、探せば。長い間シリウス様を待たせてしまうのも憚びないですし、やりますわよ。やりやあいんでしょう。全くもう」

「流石、私の妹ね。話が分かる奴で助かったわ」

「手間がかかるお姉様ですわ」なぞと嘯きながら妙に嬉しそうに口角が微妙に上がったアロガシアを見て、なんだコイツと思いつつながら気のない謝意を述べておく。

まあアロガシアがこんな調子で折れるのはいつものことだ。気にすることじゃない。

「んじゃま、頼んだわ」

「ええ、頼まれましたとも」

いい返事だ。ウンウンと満足して改めて踵を返して歩き出す。行き先？ 俺の部屋だが？

果報は寝て待つに限る。アロガシアが任されたと言うのならそれを信じるのが姉というものだ。信じるというなら俺も相応の行いをしなければならぬ。つまりはそう

いうこと。信頼っていうのは行動で示すものだ、俺は、そう思うのである。

そういう訳なので早速帰路に就いたわけだが、どういうことかアロガシアが何故か付いてくる。多分、たまたまアテの場所へ行くための道が被っただけだと思うので特に触れない。廊下を曲がる。

同じくアロガシアも廊下を曲がる。俺と同じように……………まだ偶然の可能性はないこともない。

意味もなく道を逸れる。同じくアロガシアも……………うん。

「……………どうして付いてくるのかしら？ 二手に分かれて探した方が効率的だと思うんだけど」

「舐めないでくださいいな。私にアナタの意図が読めないと本気で思っているのなら大間違いですわ」

……………

「分からないわね。なんのことか」

「惚けるならそれで結構。でも万一、私だけが苦心してアナタは怠けて遊んでいるなんて事態になるのは非常に癪なのでね。逃がしはしませんわよ」

「……………好きにしなさい」

ふっ、所詮ただの鴨だと思っていたが我が妹よ。なかなかどうして成長しているよう



で姉ちゃん嬉しいよ。クソが。

まあサボろうとしてたのは事実だし、信用なくすことしかやってこなかった俺が全面的に悪いので強く言うことなんて出来ないんですけどね。だから死なば諸共精神で監視がてら張り付かれるのは別にいい。

いいんだが――。

「……………」

「……………」

こうなるんだよな。沈黙が痛い。俺ら仲悪いから普通に話せってなったら結構困るんだよ。話題ない以前にどう話しかけりゃいいか分からん。そもそも向こうに俺とおしゃべりする気があるのかも分からんし。気安く話しかけて無下にされたらちよつと傷つく。

なので黙りを決め込んでいるわけだが、それはそれで気まずい。空気が妙に重い気がする。どっち選んでもなかなか地獄だ。

「シリウス様とは」

なにか話を振るかどうか迷っているとアロガシアがおずおずとそう切り出してきた。「とつくに婚約は解消されているものだと思っていましたわ」

「私もそう思ってたわよ。でも相変わらずあのアホ面下げて来てるってことはそうなら

なかつたみたいねえ」

魔法適性の有無は貴族間の交流の中でもそれなりに影響が出る。ある程度それが血統に依るものであるというのももそうだが、単純に舐められやすくなるというものがある。

家の格というのは保有するチカラによって決定される。それは財力であり、権力であり、戦力。形はいくらでもあるが、魔法の力というものはその中でもかなり分かりやすい。視覚化されているからだ。さながら神話の神々の振るう奇跡の如く、そのチカラを魔力を持たない人々は信奉している。

ある意味、魔法適性が群を抜いて高い家が貴族となつてそういう連中の上に立つのは必然だった。人間は自分の及ばないチカラを持つ存在を畏れて敬う生き物だ。闇夜に紛れて光に群がる蛾のように自分より強い存在に惹かれて従う。盲信といつてもいい。

つまり、貴族社会の者共にとつて魔法とは人々を従えるためのツールなのだ。それを失えば少なからず混乱を招きかねない以上、下手なりスクは取るべきではない。

ある意味、美醜や教養よりも優先されるべき事項なのだ。魔法適性というやつは。

「理解に苦しみますわね。お姉様のような不良物件、タダでも要りませんのに」

「なに、喧嘩売つてんのアンタ？ 買うぞゴラ」

それはそれとしてんな言い方されてキレイない訳じゃない。人の感情というのは事実には則さないものなのだ。

「でもまあ、理解不能っていうのは賛成するわ。実際、そういう話も出てたらしいけど。シリウスの奴が蹴ったつてき。代わりに面倒な条件でも出されたんじゃないかしら？」

一応、チカラは代替が利く。俺を娶る代わりに何かしらの功績を立てるみたいな妥協案を出すか出されて、それを飲んだつて感じじゃないかな。知らんけど。そうまでしてこんな可愛げの無い小娘が欲しいもんかね。逆に迷惑だわ。

「随分と余裕ですわね。その条件とやらが達成出来なかつたら晴れて婚約は破棄。いき遅れ確定のお払い箱になるというのに」

そりゃ余裕よ。結婚すんのやだし。あーでも、そうなつたらどこぞの小汚いオッサンのとこに出されるようになるのかな。そいつはヤダな。キモいし。

まあ、でも。

「多分だいじょうぶつしよ」

「……………その樂觀の根拠は？」

眉をひそめてアロガシアが尋ねてくる。根拠という根拠でもないし、樂觀的であることとは否めないが理由は簡単だ。

「あれでもアイツ、約束破つたことないからね。だから何とかするんじゃないの？」

その点については俺はあの小僧を信用している。たとえ達成は出来なくとも、最大限の努力をした上で手を尽くすだろう。アレはそういう男だ。そこまでやってダメだつ

たなら、それはしやーないので責めるつもりはない。

俺としてはそういうことを結構軽いノリで言ったつもりだったが、思いのほかアロガシアの表情がキツイものになった。ホンットに悔しげに歯を食いしばるなどしている。

え、なんで？　もしかしてこの娘、シリウスのことが好きだったりするのかな。俺への当たりが強いのもそれが原因だったりして。

一応こいつにも婚約者がいるんだが、以前会った時はロクでもない奴だったし、然もありません。そういえばアロガシアの俺への態度が変わったのもあのとときだったけな。

んー別に俺としてはこいつとシリウスがくつつくのは全く問題がないんだが。なんならクソ親父にでも打診してみようかな。攻略結婚ってなら俺じゃなくてアロガシアでもいいだろうしな。

「アロガ」

そんなことを口にしようとした時だった。

「やつ。二人とも！」

それは一瞬だった。考えるより先に肉体が反射行動を起こしていた。

咄嗟に背後で聞こえた声。左肩に乗せられた手。それを認識した瞬間、ただ頭が真っ白になった。

シヨック。

恐慌。

そういう症状。

ただ、敵がそこにいることだけが分かった。

左腕を振り上げてのつけられた手を弾く。

同時に、左足を軸にその場を駒のように回転する。

くるりと。回転する視界。敵を認識する前に右拳を振り回す。回転エネルギー。遠心力。腰を入れて身体ごと巻き込んで、そういうものが蓄積された拳は勢いを伴って今にも敵に叩きつけられようとして――

「お姉ちゃんー！」

悲鳴にも似たアロガシアの絶叫に我を取り戻した。そして気付く。敵の正体。自分が攻撃の最中にあることを。

やっぱ。多分、そう思った頃には遅い。肉体と思考のスピードは同速ではない。思考を挟んでは対応が遅れるので、基本俺は反射で身体を動かしている。

だから咄嗟にわざと体勢を崩して倒れ込む形で勢いを殺そうとしたのは反射的にとった行動なのだろう。

倒れ込む身体。目まぐるしく状況が動いたので未だに混乱の最中にある俺。受け身

は取れない。

そんな俺をそつと支える存在があつた。優しく俺の体を抱きとめたのは先程俺に触れてきた人物。

「すまん。まだダメだったか。冗談でもやるんじゃないな」

俺とアロガシアの兄。バニタス・オブセションだった。